

夏の北海道を尋ねて

北海道への観光熱は年々盛んになる一方である。このなかには タクシーやレンタカーまたは大型観光バスによる豪華な旅行をするものや リュックの中に寝袋を入れて 周遊券の期間のあるうちとは 道内のあちこちを歩き廻っている学生など いろいろである。私たちが夏に地質調査をしているとき 日高の黄金道路で 糠平湖から然別湖へ抜ける山道などで これらの若者達が列をなしてつづいているのに会うことがある。この人達のなかには地質について興味を持っている人も多に違いないし あるいは地質を勉強している人もいるかも知れない。その旅行の一助にもと 札幌を中心とした北海道の地質のみどころといったものを記したのがこの記事である。各コースの文献はおもなもののみにした。くわしい地名もぜひ5万分の1地形図を参照されるようお願いする。質問があったら各項目の執筆者にお寄せ下さい。

函館にて

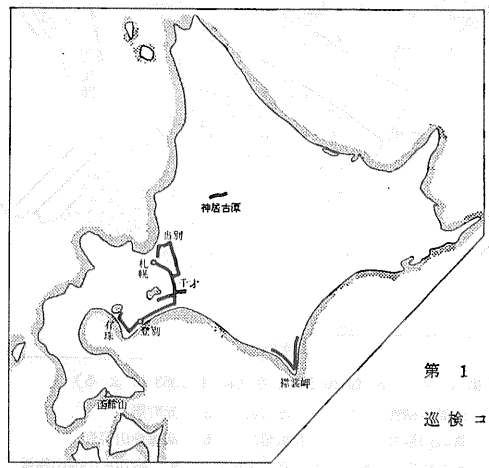
鈴木 守 佐藤 博之

青森を出航した青函連絡船は3時間50分で函館に到着する。その後半約1時間は 北海道松前半島の東岸沿いに 海岸にほぼ平行して進んで行く。

北海道の地質が最初に船を迎えるのは 進行方向左手に続く海岸段丘と 右手前方にある函館山である。

北海道は海岸段丘の発達が良いところとして知られているが 連絡船からよく見えるのは 松前半島を一周する比高25~40mの三ツ石段丘であり その時代は リス・ヴェルム間氷期とされている。三ツ石段丘の構成層は層厚3m前後の薄い砂礫層と砂層で 段丘面は削断面の性格を有している。段丘面の下には砂岩・シルト岩からなる中新世~鮮新世の地層が黄灰白色の海蝕崖をなして連続露出しているのがみえる。三ツ石面の背後には 野辺地面・修道院面などがあるが 連絡船からははっきりしない。船が函館山を右手にみるようになると 船足はにわか落ちて 船は180°転回して函館棧橋につく。

函館市はこの函館山と それを亀田半島につないだ砂州の上に発達した街である。函館市の生命ともいべき港も 函館山のふところにつつまれた天然の良港であり いわば 函館山は函館市の生みの親ともいべきであろう。函館山の地質は 遠く安政元年(1854)のペリ日本遠征記の中に 彼の船医の観察として 花崗岩と閃長岩とからなると記されているが 当然これは誤りである。その後 文久2年(1862)には幕府が招いた米人ブレイクによって踏査されており 日本最古の地質学的観察の記録を有している。しかし 函館山は明治33年から昭和20年までの長い間旧日本陸軍の要塞として使用され 一般の人の立入りも禁止されて 地質学的に



第1図
巡検コース